

《資料》

カトマンズ盆地住民であるネワール族のジャブ

シャム・ダンゴル

ネパールはインド大陸とチベット高原に挟まれ、ヒマラヤ山脈を背にして、その南側に位置する。北からヒマラヤ地域、中部の山間地域、南のタライ平地に分かれている。国土の面積は日本の北海道の1.8倍でその80%はヒマラヤとそれに続く中部の山岳地である。残りの20%の地域だけは、平地のタライ地域である。

ネパールは、自然と共に住民も一様ではなく、言語、風俗、習慣が異なる20種類以上の多民族で構成されている。地域によっていろいろな民族が住んでいる。その主な地域と民族は以下のとおりである。

地 域	民 族	言 語
カトマンズ盆地	ネワール族	ネワール語
ヒマラヤ地域	シェルパ族	シェルパ語
カトマンズ盆地及びその周辺	ブラマン・チェットリ	ネパール語
中部ネパールの山岳地域	ライ族 リンブ族 マガル族 タマン族 グルン族 タカリ族	ライ語 リンブ語 マガル語 タマン語 グルン語 タカリ語
南のタライ平野	マイティリ族 ボジュプリ族 タル族	マイティリ語 ボジュプリ語 タル語

首都のカトマンズ盆地は中部山岳のマハバラット山岳の中にあって、大きな盆地となっている。そして、ネワール族が古くから住む町である。昔ネパールといえば、カトマンズ盆地を指していた。したがってネパールの歴史はカトマンズの歴史であると考えられる。この盆地は昔湖だったが、チベットからモンジュ菩薩が盆地の四方を囲む山を切って湖の水を流し出して、住みよい町をつくったという伝説がある。

13世紀から18世紀の半ばまで続いたMalla王朝はカトマンズ盆地の外から入ってきた王朝である。Malla王朝は盆地の先住民をネワール人とよび、盆地を統一した。

盆地にはカトマンズ (YEN)・パタン (YELA)・パクタブル (KHWAPA) と、三つの歴史を持つ古い町がある。この地で 2000 年以上にわたって発展してきたネワール文化は優れた美術や建築物を生み出している。町並みに残る美しく装飾された建物、彫刻や絵画は、この盆地全体がそのまま美術館であると外国の方々に言われる。それらの美術品は様々な神や女神に捧げられネワール工芸の技術の向上に貢献した。昔カトマンズ盆地には「家と同じ数の寺院があり、住民と同じ数の神仏像がある町」と言われていた。

ネワール族は様々なグループに分かれ、また一つのグループでも職業によって細かく、様々な民族や種族、そしていろいろなカーストなどに分かれている。

グループ	主な仕事
ブラマン	教える仕事、寺院や僧院などを守る仕事
チェットリ	国王をはじめ政治、役人、国を守る仕事
バイシェ	職人
スッドラ	きたない仕事

上記の 4 つのグループの中バイシェが一番多くの種族があり、一番多くの職業によるカーストに分かれている。

	種族(カースト) 書く時の名	呼ばれている名 言われている名	職 業
1	BAJRACHARYA	GUBHAJU	葬式や結婚式や寺院を守る仕事など
2	SHAKYA	BARE	銀細工、金細工の仕事をはじめ、鋳物、鍛金などで入れ物、器などの家庭用品を作る 大工、建築、服などを作る
3	SHRESTHA	SHESHYO	役所に勤める、商売をする
4	MAHARJAN	JYAPU	農業
5	TAMRAKAR	TAMAH	銅の板を叩いたりして入れ物を作る
6	RAJKARNIKAR	MADHIKAMI	菓子屋
7	SILPAKAR		象牙、木、石などの彫刻
8	SILPAKAR		石細工
9	CHITRAKAR	PUN	絵かき屋
10	NAKARMI	KAU	鉄鍛冶屋
11	NAPIT	NAU	髪の毛を刈る(床屋)、爪先の爪を切る
12	TANDUKAR	KHUSAH	農業、人が亡くなった時に、火葬場へ運んでいくときに音楽を演奏して行く
13	BYANJANKAR	TEPE	農業、特別に作るほうれん草がある
14	RANJITAKAR	CHHIPA	布を染める
15	MALAKAR	GATHU	花屋

	種族(カースト) 書く時の名	呼ばれている名 言われている名	職 業
16	BARAHI		大工屋
17	KANSAKAR	KASAH	錫の器などを作る
18	KULU		太鼓、笛などを作る
19	KASAH	NAYA	肉屋、死人を火葬場に運ぶ時に音楽を演奏する
20	KUSLE	JOGI	ラッパを吹く、死んだ人にあげるご飯などや服を作る
21	PODE	POH	魚釣りをする、竹で籠などを作る、機織りの時に糸を通すアミのような物を作る
22	CHYAMI	CHYAMI	掃除屋

現在ではカトマンズ盆地以外に BHOJPUR, CHAINPUR, BIRATNAGAR, DHARAN, TAN SEN, PALPA, TRISULI, POKHARA などの各地域にもネワール族の人達が広がっている。一つの種族の中でも違うカーストの人々が多い。カーストが違うと結婚ができない。一般に山岳住民はモンゴル系が多く、南のタライヘ市にはアーリア系が多い。

MAHARJAN 及び JYAPU

ジャプの意味を考えて見ると「ジャ」は仕事という意味で、「プ」及び「フ」はできるという意味である。したがってジャプの意味は仕事ができる、つまり自給自足ができる人達、または頑張り屋という意味である。家族、親族、近所の人達がお互い共同で助け合って暮らしている。特に農業を主とする仕事をするが、その他大工、漆喰を張る、機織り、スクー(薬で作る敷物)を作る、陶器を作る。生活に必要なたいていの物を作る。バジャラチャルヤ、シャキャ、シュレシュタなどが持っている田畑を借りて農業をしている。年中忙しい。けれども生活は豊かではない。田畑を借りているため、田畑主の家に何か仕事があった時に、いつでも手伝いをさせられていた。田畑主を喜ばせることができない場合には借りている田畑を取り上げられる心配があり、無理をしてでも手伝いに行く。

田畑を借りているために年に一回、粃や米を借り賃として、粃及び米や野菜などを田畑主に届ける。田畑の質によって届ける物の量は多少違う。粃や米などを届けられない年にはお金で払う。

◎日常生活：

太陽と一緒に寝て、太陽よりも早起きをしていた。朝は母親、父親、祖父、祖母、そして子供の順番に起きる。夜は子供、祖父、祖母、父親、母親の順番に寝るのが普通だった。朝起きると玄関の所から掃除が始まり、お祈り、そして食事の準備から、食事が終わると田畑や他の仕事に出かける。

◎住まい：

普通赤レンガや日干しレンガ、粘土と木で作った四階建ての家だった。屋根は瓦か藁葺きだった。一階は藁、農具、つまり物をしまう倉庫だった。家畜小屋、鶏小屋、肥料を作る場所、粃から米を作る所なども一階だった。お酒を作ったりする時の竈も一階だった。水道やトイレはなかった。二階は物をしまう倉庫、部屋、寝室、客間だった。三階はほとんど部屋がなく、一続きの広い所になっていた。行事や多くの人が集まったりする時の場所だった。粃が沢山ある家ではボカリといって粃をしまう所が作ってあった。四階は台所、薪や藁をしまう所、物をしまう所となっていた。

天井が低くて、窓が現在とは違う。お金持ちの家は、細かく美しい木彫りの窓だった。ベッド、テーブル、椅子などの家財道具は全然なかった。寝る時に布団をしいて、起きると畳んでしまう習慣だった。布団はあまりなかった。時と場合によって、部屋の用途は違っていた。そのため寝室、客間といった用途の名の付けられた部屋はなかった。床は土なので壊れやすい。そのため時々赤い土と牛糞を混ぜて塗る。現在でも残っている。

◎着る物

たいてい自分の家で機織りをして作った布でできた物を着ていた。昔着ていた物は、現在の着物とは全然違う。それは布地からデザインまで全部違う。冬には藁でできた靴を履いていた。他の季節は普通裸足だった。スリッパもなかった。

- ・男性：ダウラ、スルワールを着て、腰巻きを巻いていた。そして帽子をかぶっていた。
- ・女性：黒いサリをして、ツォロを着て、長い腰巻きを巻いて、冬には毛糸でできたショールを、他の季節には木綿のショールをかけていた。女性は田畑の仕事がないときには機織りなどの仕事をしていた。普段着と特別な行事などに着るものを作った。

◎食生活

朝、昼、夜、一日三食を食べる。食事の時間は現在と違って、早かった。白いご飯、小麦粉を練って鉄板焼きにしたもの、煎ったトウモロコシに煎った大豆、稗、ジャガイモなどが主な食べ物だった。

- ・朝食：母親は早起きをして朝食を作る。忙しい人達だから季節によって朝食の時間は早かったり遅かったりしていた。早いときには六時半か七時までに食事が終わって、田畑に出かける。
- ・昼食：昼食も朝食を作るときに作っておく。十二時は昼食の時間。チウラ、煎ったトウモロコシ、小麦粉を練って鉄板焼きにしたものなどが昼食となる。
- ・夕食：田畑へ出かけていた母親が帰ったら夕食を作り始める。大人の女の子がいる家では女の子が夕食を作る。朝食と同じ物が夕食になる。早い時には七時ぐらい、遅い時には八時ぐらい。夕食が遅い時にはもう子供たちは食べずに寝てしまう。たいてい自分の家

にできたものを食べる。野菜を干した物、豆を食べていた。季節折々の食物を食べていた。

肉や卵や果物を食べるチャンスはほとんどなかった。季節折々の物しかなかったために季節によって食物が違っていった。トマトは食べてはいけないものだった。お茶の習慣はなかった。自家製のお酒類はいろいろあった。季節によって違う酒を作っていた。

◎燃料：

薪、藁、麦藁、トウモロコシの茎などが燃料だった。電気やガスはなかった。食事を作る時には台所のあるあたりは煙だらけだった。鍋などは真っ黒で磨きにくかった。

◎明かり：

電灯はなかった。真っ暗だった。明かりがないために石油や灯油を使っていた。電気がなかったために冬は火鉢を囲んでいた。夏は町の中に水が溜まっている所やきたない所が多かった。蚊が沢山いた。下痢、マラリア、天然痘などの病気があった。

◎家庭用品：

ほとんど陶器のものを、沢山使っていた。銅や真鍮や鉄や錫など金属でできている鍋や器なども多少使っていた。アルミが普及して陶器が減った。次にプラスチックが普及しアルミも減った。現在は陶器、アルミ、プラスチックからステンレスやガラスの器と変わっている。ネワール族の人々は、家族の中では一人だけが持つもの、つまり個人の物はなかった。何でも共同で使っていた。

◎物を手に入れる：

自分の家で作った穀物(粳、米、にんにく、たまねぎ、じゃがいも、麦など)をあげて素焼きの入れものや鍋、タライなどの器、竹でできた籠など、桃、李(すもも)、梨や油などをもらう。シーズンによって様々なものを運んで交換に来る。つまり物々交換で手に入れていた。

◎洗濯：

機織りして作った布地でできた衣類だったから厚かった。共同水道や、川、池などの水場へ行って洗濯していた。洗剤はほとんどなかった。糠や土で髪の毛を洗っているのを沢山見かけた。洗濯機というものは考えられなかった。洗濯機はいまだにない。陶器のタライを使っていた。現在ではほとんど陶器のタライは使わなくなった。

◎教育と言語：

田畑で仕事をする人達だから教育を受ける必要はないという考えだった。ほとんど学校へ行

かせなかった。したがって、読み書きができる人はほとんどいなかった。ネパールは多民族国家であり、言語の数が多い。一つの民族が持っている言葉は他の民族が持っている言葉とは全く違うので、違う民族の人同士が話す時には通じない。ネワール族は集まって住んでいたためネワール語以外の言葉は必要ではなかった。そのため、ネワール語以外の言葉ができる人達は少なかった。ネパール語ができる人も少なかった。最近では多くの人達は民族の言語とネパール語が話せる。現在ではネパール語は国語となっている。

◎宗教：

ネパールではヒンズー教、仏教などの宗教を信じている。けれどもカトマンズ盆地に住むネワール族は、自分はどの宗教を信じているのか、意識していなかった。他の人に聞かれたら初めて考える。普通ヒンズー教と仏教を区別して考えていない。神様は皆同じであると考えている。

◎仕事：

仕事は男女や男の子供と女の子供の仕事に分かれていた。

- ・男性：田畑での力がある仕事は男性の仕事だった。藁でゴザ(スクル)を作る、藁や麻で冬のための靴を作る、建築物の壁も作った。
- ・女性：田畑の仕事、洗濯、掃除、子供の世話、機織り、お酒を作る、料理をする、米を作る。
- ・男の子供：田畑の仕事を手伝う。
- ・女の子供：家の掃除、水汲み、食事の準備、妹や弟の世話をする。

父親、母親、そして若い人々が皆田畑に出かけるので、仕事ができない年寄りや子供たちだけが家に残る。家に残る子供の中で一番年上の子供のいる家に、他の子供達用の昼食を集めて預けておく。昼は皆一緒に楽しく分けて食べる。赤ちゃんがいる場合には田畑に連れていく。

そして、赤ちゃんの世話をする子供も連れていく。まだ田畑の仕事はできないが少し大人になった子供を中心に他の子供達を家に残していく。

◎田畑の仕事：田植え、草刈り、稲刈り、麦刈り

肥料になる土を掘り出す仕事で年中忙しかった。田畑の仕事がない時には日当で他の人達の仕事に行く。

化学肥料は全然使っていない。藁、落ち葉、牛糞、家畜の糞、焚き火の灰などの不要品で肥料を作っていた。カトマンズ盆地は昔の伝説によると湖だった。それは本当の話だと考えられる。今から二十年前まで、地面を深く掘って肥料になる黒い土を掘り出して、肥料として使っていた。それはとても危険な仕事だった。あの当時で作っていた野菜などは現在の野菜とは味が違って、とてもおいしかった。米や麦も現在作っているものと違う品種を作っていた。昔の方がずっと味があって、おいしかった。この肥料を掘り出す時期が農民が一番忙しい時期。

子供と父親が会う時間がない程だった。

◎田畑以外の仕事：

仕事は男女で分かれていた。

- ・男性：外へ出かけて稼ぐ、藁でゴザを作る、藁や麻で靴を作る。
- ・女性：機織りをする。チウラ(粃を煮て、二三日寝かして、煎って、臼でついて作った保存食の一種)を作る。洗濯や料理をはじめ、家事のほとんどをする。

子供：家畜(ヤギや羊)を連れて、草地へ行く。田畑の仕事を手伝う。水汲みをする。食事を作る準備をする。

◎遊び：

男の子供と女の子の遊びは違うが、一緒にできる遊びもある。女の子は布くずで人形を作って遊び、男の子の遊びはガラス玉(ビー玉?)で遊ぶ。男の子供と女の子が一緒にする遊びはかくれんぼ、粘土遊びなど。

◎おもちゃ：

粘土で作った人形、動物、家庭道具の模型など。木でできた人形、家庭道具の模型、周囲で拾った砂利。布くずで作った人形。草など。

◎協力活動：

家を建てる、田植えをする、結婚式、葬式などの時には家族、親戚、近所の人々は皆仲良く協力し合っていた。年寄りのことを皆尊敬していた。心が豊かだった。

◎楽しみ：

カトマンズのネワールほど祭りが多い民族は他にいないと言われている。次から次にやって来る祭りは宗教の祭りであったり、人生の中の出産、食い初め、成人式、結婚式、長生の行事、葬式や法事などであったり、季節の祭りである。大昔からずっと続いているこの習慣は神仏を祭ると同時に生きる喜びの一つである。祭りが近づいて来ると子供達はきれいな物を着て、おいしい物を食べることができると言って、大いに喜ぶ。父親、母親は準備で大忙しである。年中行事や祭りにお金が沢山かかるために借金が多かった。行事の他に楽しめるものはほとんどなかった。

現在カトマンズ盆地では、行政をはじめいろいろな面で便利なので、全国からカトマンズ盆地に人口が集中して、盆地内の田畑はずいぶん減り、農民の仕事は大きく変わった。いろいろな物が普及し、現在では生活が大きく変わった。しかし人間の豊かな心はどんどん失われていると言える。

ネワールのジャブの暮らし

朝 岡 康 二

以下の文は、現在カトマンズ盆地のパタンに暮らしているシャム・ダンゴルさんが日本語ワープロで書いたものである。シャムさんは40代の働き盛りであるが、かねてより日本語の研鑽を重ね、私たちと変わらないほどの会話能力を持つ方で、現在はパタンで日本語学校を経営して日本ファンを多く育てている。その一方で、私たちのようにネパール文化に関心をもつ日本人の世話もなにかと熱心にみてくださり、日本とネパールの文化的架橋という貴重な役割を担っておられる。今回のプロジェクトがなんとか無事に終了できたのも、彼の力によるところが大きく、特にネワールに関しては、たびたび彼の情報に頼らざるをえないことが生じ、時にはそのために彼も改めて勉強し、走りまわって情報を集める、といったこともあった。

このように、シャムさんはわたしたちの調査のよき理解者であったが、同時に自らの文化であるネワールに対して強い関心と愛着心を持つ方でもあって、常にネワールや自分の属するカースト(彼のばあいはジャブ)について理解を深める努力を心がけている。

そこで、調査報告書の作成に当って、シャムさんの知見も合わせて掲載したらどうか、との意見が生まれた。お願いしてみたところ快くお引き受けいただき、ここに原稿をお寄せいただけたというわけである。

ここでは、ネワールの概説的な紹介に加えて、農民カーストのひとつである「ジャブの生活」について、彼自身の生活経験からくる具体的な事柄が記述されており、素朴・率直な紹介ではあるが、わたしたちのように外側から観察・理解する場合とは異なる視点が見られ、また、少し以前の生活の諸相も知ることができて、たいへんに貴重である。これらがさらに精密なものとなって、将来「ネワール民俗誌」といってものにまとまることを期待したい。

ネワール社会については、すでに *Monk, Householder, and Tantric Priest; Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*; written by David N. Gellner; Cambridge University Press のような社会人類学的な研究成果があり、Gellner はネワール独特のカーストシステムについてヒンズー文化と仏教文化との関連から詳述している。また、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の石井溥教授のネワール研究も有名である。